



むかし、あるところ、とうふとこんにやくがいました。

あるとき、とうふが棚からおちて、ひどいけがをしました。こんにやくはそれをきいて、

「とうふのが大げがしたそうだが、どんなあんぱいだよ。」

「思、とうふの見舞いに下かけました。」

こんにやくは、べつたらくったら、べつたらくったら歩きまわりました。そして、とうふの家につ

くと、

「とうふの、とうふの。どんなぐあいだ。」

とまきました。とうふは、白い顔をぼろぼろにして、

「こんにやくの、よ、来てくれた。ま、まのとお、ひどいめにあつたぞ。」

「いいました。そして、こんにやくは、

「こんにやくの、おまえは、おれとちがつて、棚からおちても、けがをすることがなくていい。」

なあ」

「とうふの、

「とうふのはそういうが、なかなかそうでもないのだ。おれは、毎日、生きたこちが、

ないぞ。」

「とうふの、とうふがおどあいて、

「それはまた、どうしてだ。」

「それ、こんにやくは、

「だ、おれはいつも『今夜食う、今夜食う』といわれるの。生きたこちが、

い、い、い、

「あ、あ、あ、

「あ、あ、あ、